

『強欲』の来訪

―神と神の、『ありえない』とのたまう与太話―

「どうも」

「はいはい。おっひさあ」

ひらりと陰気な男に手を振る。旧友ではあるものの、相手は男。べたべたした友愛とかはない。

（……ないから）

扉の向こうでソワソワとお茶を持っていこうか、酒を持てこようか、うろうろして

いる見習いくん。ちょっと自室に戻ってなさい。

長時間会話する気はないのよ。すぐにさっぱり帰らせる気さえあるんだって。

「……扉の向こうのさ」

「おう、見て見ぬ振りしろ。僕の仔だ。食うなよ」

「食うもんか。何なのあれ、すぐく、……僕に縁遠そうな子だ」

「当たり前だろ『強欲』、僕の見習いくんは無欲なんだぞう！ 愛いだろお」

新作の薬品をランプに透かしながら『強欲』は鼻で笑う。

『淫蕩』の彼も神として変神と言われ続けているが、この『強欲』も相当な変神だ。三度の飯より実験と研究が大好きな神。

彼の一番の仕事相手でもあるこの変神も、本質は神であることに変わらない。

八つの悪徳。知能を持つ、生きとし生けるものの定めた『悪しき徳』の概念を抱く神である彼らは、故に、生きているものに己の悪徳を持たぬと聞けば鼻で笑う。

しかも相手は人間だ。持たぬ訳がない。

『淫蕩』とて、もしこの『強欲』に『性欲のない仔なんだ』とか言われてみる。鼻で笑う。

「はっ。無欲な人間なんて、人間じゃないよ。気味が悪い。アンタの贅の話はいいから、納品の話してくれないか」

「贅って言うな。愛い愛い僕の仔なんだぞ」

『強欲』はずらりと並ぶリストから顔を上げ、眉を顰めた。理解が及ばないと言う表情は神らしいものの、この変神にまさかこの顔をされるとは思わなかった。

こいつが変だと言われる理由の一つに、あるはずだろう。お前。

『淫蕩』と似た、拾い癖があるのだ。この男。

「お前だって自分で拾った子供を、贅って呼んだことないだろ？ 僕の仔だけを贅と呼ぶのは多少、酷いと思うけどな―？」

「……、アイツらは僕の助手だ。アンタのその、……扉の向こうの子供はどう見ても賛だと思うけど？ お前のニオイで埋め尽くされてる」

聡明と呼ばれる碧眼のちろりと扉に向く動作に、肋骨の奥へ不快感がたまる気がした。目の前の男も神だ。扉向こうの彼の仔を、はつきりとは言わずとも『視えて』いるのだろう。

「『視』ないでくれないかい？ あれは、私の、仔、だ」

「……馬鹿馬鹿しい。僕が君のものを盗るとでも？ 君の手垢が付きまくりすぎててご遠慮だね。……あの子さあ、いつか『食う』気なの？ それとも食った後？」

「へえ？ 君にしては随分と珍しい。淫らな話はお得意じゃないと思ってたぜ？」

「アンタはすぐに下世話な話に持っていくな？ 『淫蕩』。僕が言ってるのは『食事』じゃない。バリバリ食う、物理的な話だよ」

数秒。

何を言われたのか理解できなかった。

「……………僕が？ あの仔を？」

「ああ、その反応だと食う気はないのか。なんだ。あそこまでアンタの二オイしかしない、食う前の下拵えかと思った」

「はあ……、あの仔は俺の仔だって言つたら。僕の仔！　なんだぞう！　そりゃ私の二オイしかないだろ。私が囲ってるんだから」

手近な納品物を確認しながら思考の端程度で会話する『強欲』は「アンタのいつもの拾い癖ねえ。今度は人間なんて、本気が狂ってる」なんて感情もこもらずに零した。互いに『拾い癖』があるとは言え、『強欲』は珍種の、それも自分の益になる生き物しか拾わない。変わって『淫蕩』は弱者しか拾わない。

珍品揃えの『強欲』に、弱者拾いの『淫蕩』だ。どっちもどっちのくせに、互いに棚上げして互いを『変』だと言い張る。

一応これは彼らの仲が悪くないから成り立つのであって、不仲というわけではない。一応。

「……娘にするつもり？」

「娘え!？」

「え？」

薬液の色を確認している『強欲』は、心底不思議そうに首を傾ぐ。

まさか、神の口から「人間を娘にしたいのか？」なんて聞こうとは思わなかった。

如何な『淫蕩』とて、まさかこの『強欲』からそんな家族ごっこみたいな話をされるとは、欠片も。

「違うわけ？」

「違う。違うに決まってるだろう！ あれは『私の仔』なのであって、娘じゃない」

「何が違うんだよ。じゃあやっぱり贗じゃないか」

「贗じゃない！ 君ってやつはいつからそんな極端な選択肢しか用意できない神になったんだ？」

「普通の神は、身内にしないなら贗だと思うけど？ アンタこそ、『こっち』に居すぎ

て感覚狂ったんじゃないの」

「……とにかく。娘じゃない」

「……」

大体娘なんて。それだと血が繋がっている肉親みたいじゃないか。そんなのは違う。血は繋がっていないし、あの仔は娘じゃない。娘だったら、そんなの、

「『淫蕩』に、妻が出来たとは。アンタが伴侶を作るのは初めてだね」
「……………は？」

はん、はんりよ？

わたしのこ、が、はん、……つま？

わたしの？

「……え？」

「アンタの初めての伴侶なんて。僕らのとも賑わいそうだ。アンタの『体』のある、『神殿の大地』は特に煩くなりそうだね」

「は、いや、いやいやいや。はんりょ？　ぼくが？　あ、あはは！　『淫蕩』の私が!？」

「……ふ、なんだよ。自覚がないのか。それはそれは」

恭しく頭を垂れて、ローブを広げる。その仕草は優雅そのものだが、彼をちろりと見上げる瞳には恭順なんて一切宿っちゃいない。

茶番を楽しむ、享楽の色。それに挑発が滲んでいる。

「安心しな、僕が広めておくよ。『淫蕩』が伴侶作ったってさ」

「……いいぜ？　どうせ嘘っぱちだ、誰も信じるかよ。私だってお前の領土に行って広めてやろうか？　『強欲』が弱者を拾ったってな」

「ははっ」

ローブが広がり、納品の商品をすべて包み込む。

「言ってな。僕にそんなこと、ありえないね」

フンと鼻を鳴らす間に来訪者はぱつと魔法で『道』を開き、帰っていく。
へーんだ、もう暫く来るじゃないやい。

んべー、と虚空に舌を出していれば、入れ替わるように扉が開いた。

あらら。見習いくんがこちらを氣遣わしそうに伺っている。その手にはそこそ良い
陶器のお茶セット。

珍しい来客だからと、良いのを出してきたのか。

「ン？ あー、見習いくん。お茶淹れてくれたのか。ごめんよう、アイツは帰っちゃっ
たから僕と一緒にお茶しよーぜー」

残念そうに眉を下げる彼の仔に、彼は腕を伸ばした。

愛い、愛い、彼の仔。

彼の守ってあげる、大切な仔。

贅なんかじゃない。娘にする気だつてない。

『印』を刻み込んで、『身内』になんてしない。

この仔は、人間として生かしてあげるのだ。いつか、己の手を離れていくのだから。

(……、そうだ。僕は、この仔を手放してあげないといけないんだから)

神と同じ時間を生きさせるなんて、そんな酷いことはしない。
だって、大切なんだから。

(……むねが、いたいなあ)

痛む理由なんて知らない、知りたくもない。

今はただ、この小さな子供と過ごす時間を大切にしたい。慈しみたい。
それだけで。

「見習いくん、茶菓子はなあに」

それだけで。

それ以外、要らない。



「それにしても、『淫蕩』に伴侶とはね」

享樂的で、女はとつかえひつかえの神にも唯一は作れるらしい。

今までだってその気配はあったが、『淫蕩』自身に変な潔癖があるせいで最後の一線は越えなかった。

自分を怖がらないで欲しい。

弱者ばかりを拾うくせに、弱者しか身内に出来ないくせに、怖がられたくない。

馬鹿の極みだ。『強欲』もそうだが、『淫蕩』だって強者の極みに位置する神だ。弱者からしてみれば本能的に畏れられる相手だと言うのに。

あの神は、恐怖されるのを嫌う。無意識に。

享楽の本質と、変なところで臆病者。この所為であの神に伴侶なんてとんと縁のないものだったというのに。

「ま、人間は目も悪いし、察しも悪いからなあ」

神の背負う魔力だって欠片も視えないし、あの界の人間どもは科学が発達していく段階で『感じる』能力を鈍らせていった。

怖がられたくないという神の伴侶には、まあ、向いているかもしれない。

「だけど、僕が弱者を拾うつてのは、ナンセンスだな。ありえな、……」

『地の底』、魔力の界。

「神殿の大地」に神の体を寝かせる『淫蕩』の『山』からだを眺めてから自身の体の眠る「ワインの大地」へ戻ろうとして。

ぼつろぼろの白い翼。溢れんばかりの聖力。血まみれの子供を見つけ、……顔を手で覆った。

「いつ誰が予言しろって言ったんだよ。僕はお呼びじゃないぞ……」

『地の底』ではまず滅多にお目にかかれぬ『天』の住人、天使の姿。

「う、うう……」

迫害でも受けたのか、天使だと言うのに体中は傷だらけ。そして界まで跨いで、逃避。

明らかな弱者。

自分の管轄外だ。弱者は拾うものじゃない。

自衛でもあるが、何より、彼ほどの強者だ。弱者からしてみれば神なんざ近くにいますだけでもプレッシャーだろう。これは弱者を守る行為でもあるのだ。

あの変わり者とは違う。
弱者は、決して拾わない。

「……………」

視界から外そうとしても、今にも死にそうな呻き声が聞こえる。血臭は濃く、清廉な聖力は辺りの魔物を呼ぶ格好の餌だろう。

彼は数秒唸った後、大きく息を吐いた。

「あーくっそ！ いいよ！ 拾えばいいんだろ！ 拾えばさあ！」

叫び声大きく。

『強欲』はその生で初めて、奇妙ではあるが、弱者と言える生き物を拾った。